

一休という多面体

その〈像〉と語り

一休の 頂相を読む (2)

—「七尺烏藤」像と消えた朱太刀—

飯島 孝良

前回もみていったように、右の一休頂相の自賛にもまた、一休がどのように法系を意識しているかを示唆する表現がみえる——「三尺の竹篋、七尺の烏藤、詩情禅味、慚愧す、能無きことを。寸歩を移さず、九到三登、盲女の艶曲、濁醪、漚の如し。龍宝山中、大燈を滅却す。豁。順老の外に、更に誰が子か有る、虚堂の七世、菴草の僧。諸徒、余が陋質を図して賛を需む、免れず自ら書す。天澤七世東海順一休老納」。

この頂相では竹篋は手にしているが、七尺〔約二メートル余〕の烏藤〔杖〕は描か



「一休和尚頂相」 酬恩庵一休寺藏

れていない。これは一休の頂相によく添えられる朱太刀を連想させる。そうしたものが描いてなくとも一休の姿そのものが切れ味鋭い境地を示しているとも解釈し得るが、この「烏藤」の存在意義はそう軽々に看做すべきではない。というのも、『大徳寺夜話』（『眼裡沙』）によれば、大応国師には常用していた「烏藤杖」があり、これを用いる者こそ自身の「再来人」だと言いつ残したという。そして、岐嶽妙周（季嶽とも。大徳寺二十世）はこれを手にして道心のない者を打ち殺すほど傍若無人な人柄であったが、それでこそ大応国師の「再来人」であったと伝えられているのである。また、『一休和尚年譜』応永三十一年「一四二四」一休三十一歳条には、一休が岐嶽妙周と対話したという逸話を伝える。ここでもやはり岐嶽は大応国師の記別になくなって拄杖を握るほどの「再来人」であったが、美少年を愛でて酒を呑む「落魄不羈」の人柄でも知られたという。一休がここで本当に岐嶽と対話したのかどうかは、この他に交流の跡を示す

史料がみられぬために、即断が難しい。ただ、重要なことは、当時の大徳寺においては「落魄不羈」な存在こそ大応国師の「再来人」として「烏藤杖」を打ち振るうと看做された点である。そして一休は、朱太刀が描かれていないところにもそこに「七尺の烏藤」がありありと存在していると表現する。即ち、自身は大応の禅風を体現している、といわんばかりなのである。このように、一休や妙勝寺が如何に大応の遺風を嗣ごうとしているかが表されていったのである。

自賛にある「九到三登」は「三たび投子に上り、九たび洞山に到る」の略で、唐末五代の禅僧・雪峰義存（八二二〜九〇八）が投子山に大同禅師（八〇五〜九一四）を訪ね、九度も洞山に登って良价禅師（八〇七〜八六九）に参じたものの、修行を積んでもなかなか大悟に至れなかった故事（『碧巖録』第五則・本則評唱「大正藏卷四八・頁一四五上」など）に因む。つまり、修行も詩作も無能な自分は盲女（森女を指すか）の艶曲に酔い、

瀧水（齊の国〔現在の中国山東省〕にあった河川）のように大量の酒を呑みほすという。そのような破戒が大燈以来の禪を「滅却する」とも述べるが、一体はここで「豁（核心はこうだ）」と喝破し、自らの禪風の要諦を示すという。

一体が自任するのは、破戒的な振舞をする「藟苴」である。『大慧禪師語録』卷下「中統藏経卷一・頁九八下」には、布袋和尚に因んで「藟苴、儀軌を存せずして、亦た將將濟濟無し」といい（「將將濟濟」は敵かで慎んださま）、或いは「藟苴苴苴にして、全く度を定むる無し」などと述べている。また、『虚堂和尚語録』卷十「祖秀老宿」贊「大正藏卷四七・頁一〇六〇下」に「一箇、無羈の藟苴翁」（「一箇無羈藟苴翁」とあるのに対して、無著道忠『虚堂録犁耕』は「川僧藟苴、浙僧瀟洒。蓋し此の人、蜀の四川の人なり、故に爾云う。無羈は繫絆する所無きなり。藟苴は軌轍に拘れざるなり」と注する（『基本典籍叢刊 虚堂録犁耕』禅文化研究所、一九

九〇年、一一五八頁）。つまり、南方の四川あたりの「藟苴」の僧というのは、都に近い浙江あたりの僧のように瀟洒（身綺麗で洗練されている様子）ではなく泥臭く野卑であるが、独立不羈で孤高の存在だという意味で用いられている。一体は自らの頂相に賛を求めてきた門弟たちに対して、まさに「風狂」というべき境地を明確に示していたのである。今回の頂相では、「龍宝山（＝大徳寺）中、大燈を滅却す」の句がみえるが、これは大徳寺の墮落をくさすものであるとともに、そうした「藟苴」こそ形骸化した体制にゆさぶりをかけて再活性化し得る、という精神にも通じていく。こうした表現こそ、臨済く松源く大応く大燈く徹翁という法系に対する一体の強い自覚を表すものであろう。

飯島 孝良（いじまたかよし）

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一体像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ペリかん社）ほか。